

# 分科会 3

## 地域における家族支援のあり方を考える

コーディネーター： 賛川 信幸（日本社会事業大学）  
大島 巖（日本社会事業大学）

本分科会には、100名を上回る方々に参加して頂きました。当事者の家族がおよそ4割、病院の支援者と地域事業所の支援者がそれぞれ約3割を占め、当事者やその他の所属の方にもご参加頂きました。

分科会では、まずコーディネーターより家族にとってのリカバリーとはどのようなものか、それを応援する地域での支援の体制はどうあれば良いかの考え方を提示しました。そのうえで、深澤五郎氏（千葉県市原市精神障害者家族会・こすもす会）より、家族会で家族学習会に参加して自分自身が元気になったこと、それを伝えたくて他の家族に声を掛けていくことで新しい参加者が広がってきたことや、家族会で行政機関等へ働きかけを行って地域で活動を展開している取り組みを報告頂きました。

次に、高橋吉則氏（山形市地域活動支援センター・おーる）より、山形市に配置された保健師の声かけで地域家族会、病院家族会、作業所（当時）が集まり、実行委員会方式で市の家族教室を運営するようになった取り組みが報告されました。

後半は参加者5～6人のグループをつくり、家族のリカバリーのために、家族自身は何ができるか、支援者には何をしてほしいか、支援者は何ができるか、地域でどのような取り組みができると良いかを話し合いました。

グループでの話し合いを全体共有するなかで、家族のリカバリーがどのようなものか具体的にイメージしにくいこと、支援の必要性を表明しない家族にどのようにアプローチすれば良いかを考える必要があること、家族がリカバリーを考えていても、本人（当事者）の調子が悪くなることでそれを中断せざるを得ない状況があることなどの意見が出されました。一方、参加者の中には、地域活動支援センターにおいて家族には心理教育を、当事者にはIMR（疾病管理とリカバリー）プログラムを提供しており、月に2回の家族面接を行う中で家族支援を行っているという取り組みの具体例が提示されました。家族による家族学習会に参加した後に家族学習会の実施担当者となった家族からは、家族が当事者のことで付きっきりになるのではなく、家族自身が元気になる必要があるという意見も出されました。

本分科会は、家族のリカバリーを応援する地域での支援のあり方をメインテーマとしたため、「家族のリカバリー」自体を十分丁寧に議論することができなかつた点は限界として挙げられます。しかし、家族ケアマネジメントの考え方や2市の取り組み例をもとに、家族、当事者、支援者などがそれぞれの立場でリカバリーのことを考え、そのために必要な地域での支援のあり方についてもそれぞれの立場から意見を交わすことができた貴重な機会になったように思います。今後も、より具体的なアクションとしてのアイデアが提案できるように様々な立場の人による議論を交わしていくことが重要になってくるでしょう。

《賛川信幸（日本社会事業大学社会事業研究所）》